

---

# テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

ゼニア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

### 【Nコード】

N0830Y

### 【作者名】

ゼニア

### 【あらすじ】

銀髪オッドアイで尚且つチート能力を強制的に持たされて転生させられた元一般人の物語。

この小説は神様転生、チート、オリ主の要素が出て来ます。

苦手な方は回れ右をして回れ左をしてください。

## プロローグ

「

.....ん？」

何もなく、見渡す限り真っ白な空間で一人の男が目覚めます。

「あれ？　ここどこだ？」

男はキョロキョロと当たりを見回していると

「ふむ、ようやく気がついたか.....」

そんな言葉と共に白いローブを着た老人が現れた。

.....side：謎の男

「あんた誰だよ？」

俺は突然現れた老人に問いかける。

これ夢なのかなあ.....

「ワシは最高神じゃ」

ん？西光 進？

「ああ、全国水平社宣言の」

「それは西光 万吉じゃ、ワシは最高神じゃ、言わば全ての神の頂点に立つとる者じゃな」

目の前の老人はそんな事を言う。

「くつ、可哀想に……この爺ちゃん、ボケちゃってるのね……！」

「いや、ボケとらんし、人を見た目と言動で判断すんなし」

何だ、正気なのか

「え？ てことはつまりガチなの？」

「うん、そう、ガチもガチ、大ガチじゃよ」

そんな馬鹿な……！

「な、なななな何で神様がいらっしやるんでございやすでゲスカ！？」

「落ち着け、驚き過ぎて言葉が変じゃ」

ま、まあまあ、と、取り敢えず落ち着こう。

すーはー、すーはー。

よし。

「落ちついたな？」

では話そう、お主がここにいる理由などをな」

- - - - -

神様説明中・・・

- - - - -

「つまり俺は死んだ、と」

「うむ、そうじゃ、下級神が誤ってお主を殺しての、偶々ワシが下界を覗いていたから良かったものの、お主を殺した下級神はバレていないと思ったのか、誤って殺した事を隠蔽しようとしておったから」

ひでえ、神様が殺しを隠蔽とか……

「じゃからその神には電気アンマ8時間の刑にしておいた」

「地味に辛い」

「ちなみにその下級神、女神ね」

らめええええ！？

「正直その女神を見に行きたいが、我慢して、結局俺はどうなるの？」

「こちらのミスじゃからな、お主には転生してもらっぞい」

おおっ！？ 来た、転生！

「異論は無さそうじゃな、では今からワシが言う条件と世界をどれか一つ選んでくれ」

1・子供魔法先生がいる世界へ行く、容姿は銀髪オツドアイ+チート能力。

2・ゾンビで溢れかえった世界の日本に転生する、容姿は銀髪オツドアイ+チート能力。

3・女性しか乗れない兵器がある世界に転生する、容姿は銀髪オツドアイ+チート能力。

4・何の不思議な事もない世界、かと思いきや悪の秘密結社とかいる世界に転生する、容姿は銀髪オツドアイ+チート能力

5・本気で何もない平凡な世界に転生する、容姿は銀髪オツドアイ。

「はっはっはっ、おいおいおいおい」

銀髪オツドアイでチート能力で。

「どこのテンプレチートオリ主だよ！？」

「気にいらんの?」

「気にいらんわ!？」

せめて銀髪オッドアイは止めて!？」

銀髪オッドアイとかいや過ぎるわ!

「残念じゃが無理じゃ」

何で!？」

「こんなテンプレチートオリ主になるならこのまま死んだ方がいいよ!」

「どうしても嫌なのかの?」

「やだよ!」

断固拒否する!

「しかたないの……」

諦めてくれたのかな?

「なら、無理矢理じゃああああ!!!!!」

じいさんがそう叫んだ瞬間、足下に穴が開き、落ちた、俺が。

「まさかの強制いいいいいい！！？」  
「こんのクソジイいいいいいい！！！！」  
「……………」

## 第1話 転生

どうも、皆さん。

俺の名前は『如月きさらぎ 煉夜れんや』

え？ 誰って？

プロローグにいた謎の男だよ。

あのクソジジイに強制的に転生させられて、七年ほど立っています。  
キングクリムゾンだが、赤ん坊時代の事を話してもしようがないし  
ね。

それはそうと、あの駄神ガチで銀髪オッドアイに転生させてくれや  
がりました。

信じられないだろ？ 日本人なんだぜ……俺。

ちなみに転生直後の回想……

- - - - -

『無事転生出来たみたいじゃの』

『おい、クソジジイ！

ふざけんなよ！？』

銀髪オッドアイなんかにしやがって！

どうせ銀髪オッドアイならラグナに憑依転生とかしたかったわ！

『あれあれ？ 最高神のワシにそんな事いっていいのかの？ くだすよ？ 天罰』

『やれるものならやってみろよ』

『運がよかったの、MPが足りないみたいじゃ』

『死ねよ』

ギャグってんじゃないやねえよ……

『まあまあ、そう怒るな、転生してしまったモノは仕方ないじゃろ』

アンタが強制的に転生させたんじゃないやねえか

『四の五の言うでない、では今からお主の能力を教えよう』

えらく唐突だな。

しかし能力か……まあチート能力なんだろうね。

『お主の能力は以下の通りじゃ』

1・界王拳

2・サイヤ人並みの気

3・SSS級魔力

4・ニコポ

5・ナデポ

『あ。あと、お主がおる世界はリリカルでマジカルな魔法少女の世界じゃからな』

『おかしいだろ!？

何だよ、界王拳って!？

公式チート能力持つてくんなよ!？

それにサイヤ人並みの気ってどの位だよ!？

いや、それ以前にニコポとナデポはいらねえ!』

『ほっほっほ、安心せい、界王拳は今のお主でも5倍まで耐えられるからの』

『そついつ事を言ってんじゃ……』

『じゃ、そついつ事で』

そついい、じいさんの言葉は途切れた。

『え、ちょ……』

マジで？』

- - - - -

回想終了。

正直、SSS級魔力だけでよかった……

そして、ニコポとナデポは本当にいない……

てかあまりにも能力が濃かったからスルーだったが、リリカルなのはの世界ってのもおかしいよね。

確かさ、あのじいさんが選べって言ってた世界ってさ

1はネギま

2はおそらく学園黙示録

3はインフィニット・ストラトス

4は秘密結社とか言ってたから仮面ライダーとかかな

5は普通の世界

……リリカルなのはは選択肢になかったじゃん……

適當すぎだろ、じいさん……

まあ、もう半ば諦めてるけど。

あれだな唯一の救いは俺の両親が銀髪オッドアイっていう明かに異常な俺を気味悪がったりせずちゃんと育ててくれてる事だな。

ありがとう、母さん、父さん。

そして、ニコポとかふざけた能力のせいで笑えなくてすみません。

……

さて、能力の事だが。

まず界王拳、赤ん坊の時から5倍とか出来る時点で薄々気づいてたけど、成長に連れてさらに倍に出来るようになった。

現在8倍まで出来るようだ。

これ、悟空みたいな修行したらどうなるんだろうね。

次にサイヤ人並みの気つてのはどうやら、悟空とかベジータ並みの気を持つてるようだ。

しかし、サイヤ人じゃないから気を100%フルには使えないみたい。

いや、正直クリリン、いやヤムチャ並みの気でもかなりチートだけどね？

夢のかめはめ波が撃てるのかな……

次にSSS級魔力、これがある意味普通。

よくある感じのチート能力だよな

取り敢えずデバイスとか無いわけだから使い方がよく分からんがりンカーコアがあるのは感じられた。

んで最後はニコポ、ナデポと……

何でこんなハーレム作るぜ！みたいな最低系の能力なんだろ。

ニコポのせいで俺、アレだよ？ 無口無表情で何時も隅っこで本呼

んでる長門さんみたいポジションになってるんだよ？

唐突なアクシデントで笑いそうになった時とかマジ困る、必死で顔隠さんとヤバいからな……

一回ニコポを偶々いた猫さんにやってみた事があるんだが、凄いなつかれた。

どんなに引き離そうとついてくるから、界王拳使って逃げたのに俺の事追いかけて来たからな。

お陰で今は我が家の家族です。

ナデポは言わずもがな、ニコポが猫に対してではあるが威力が絶大だったからナデポとか出来ねえ、てか初対面の人を撫でようとかしたら変態だよ。

この二つの能力は正直どうにかせんとヤバい。

将来的にもしも子供が出来たりしたら、俺自分の子供に笑いかけたり撫でたり出来ねえじゃん……

親に本気で惚れる子供とか薄い本だけでいいよ。

しかも厄介なのが男に対しても効果あるってのがダメだよなあ……

何とかしないと、ウホッな展開に……

止めよう……  
想像したら気分が……

ま、まあまあ、うん、とにかく、こんな感じで俺の第二の人生が始まったのでした。

## 主人公紹介

【如月<sup>きさらぎ</sup> 煉夜<sup>れんや</sup>】

神様に強制的に銀髪オッドアイのテンプレチートオリ主にさせられた元一般人。

鏡をみるたびに毎回orz こうなる。

だがかなりのイケメンではある。

最近、名前もオリ主っぽい気がするんだけど……と更にネガティブっている。

能力は界王拳、馬鹿みたいに高い気、今から数年後のなのはさん並みの魔力、ニコポ、ナデポ。

界王拳は最初から使える。

気は練習中、しかし、界王拳が使えるためにすぐに扱えるかもしれない。

魔力は扱い方が分からない、正直気だけでもいいんじゃないかな？と思っている。

ニコポのせいで社交性皆無の男の子になってしまった。

しかも、銀髪オッドアイというのもあってか友達がいらない。

しかし、内心でははっちゃけ倒したくて仕方がない。

人がいる前で笑えない分、家の自室で思う存分笑っている。

能力を完全に使いこなせるように頑張っているが、ニコポのせいで原作に介入するかどうか悩んでいる。

「これも全てニコポって奴の仕業なんだ」

「なんだって、それは本当かい？」

## 第2話　なのはちゃんはいいい子だねえ

やあ、みんな、如月だよ

目と目が逢う

ごめん、何でもない。

只今俺は

「ねえねえ、如月くん、なに読んでるの？」

原作キャラに絡まれています。

あ、ちなみに今学校ね。

因果的な何かがあるのか俺は私立聖祥大附属小学校に入学した。

そつ、今俺に絡んでる原作キャラとは、『高町なのは』

主人公だった。

何故かは分からないが、入学してから段々孤立して誰も俺に話しかけて来なくなっただのに、なのはさんだけが度々俺に話しかけてくるのです。

何故だ。

ニコリともしたことないからニコポの呪いを受けた訳じゃないはずなのに……

「あっち行け」

俺はなのはさんに冷たく言う。

その言葉でなのはさんは悲しそうな顔をする。

ごめんねええええ！！！！

こんな事言つて本当マジごめんねえええ！！！！

でも孤立した俺に話しかけてくれる優しさに顔がニヤけそうになるからあああ！！

正直ニコポってどういう笑い方でポツてなるのかわからんからニヤリとも出来ねえんだよ！

「ちょっとあんた！　なのはがせっかく話しかけてるのに何でそんな事言うのよ！」

『アリサ・バニングス』さん怒鳴りながら登場。

アリサさんの怒りはごもつともです、俺も俺自身に怒鳴りつけたい、いやむしろあのジジイを怒鳴りつけたい。

「だ、ダメだよアリサちゃん、私は気にしてないから、ね？　行く！」

と、なのはさんはアリサさんの腕を引きながら行ってしまいました。

「ちょ、なのは！？　まだ話が……」

ごめんなさい、心の中で土下座します。  
いやむしろ土下寝します。

ダメだと言っならヤムチャ寝します。

爆発してから。

.....

「ちょっとなのは、どうして止めるのよー！」

アリサがなのはに問う。

「アリサちゃん、落ち着いて」

怒っているアリサを『月村　すずか』がなだめる。

「大丈夫よ、すずか、私は常に落ち着いてるわ」

アリサの言葉に「そうかなあ……？」と疑問に思うすずかだが口には出さない。

「ていうか、なのははどうしてアイツに構うの？　ほとんど喋らないし、何時も無表情で本読んでるし、はつきり言って根暗よ？」

ズバツと言うアリサ、本人が聞いていたら心の中で泣いてそうだ。

「……如月くんはね、何時も寂しそうな目をしてるの」

なのはが喋り出す。

「男の子達が漫画やアニメの話をしてる時に話に加わりたそうにしているし、お弁当食べてる時も誰かと一緒に食べたそうにしているの」

その時の煉夜。

【少年達の話】

（うおおおお！　あの少年達、ドラゴンボールの話してるじゃねえかよ！

この世界にもドラゴンボールあるのかよ！？

やべえ、話に加わりてえ……！  
ネタバレしてえ……！（）

【昼食】

（寂しい。）

俺以外みんな、グループ作ってんのに俺だけポツリと……

くっ、給食だったら強制班になるのに……

まあ、班になっても俺に話かけてくる奴はいないだろうけど……

やべえ、目から汁が出そうだ）

「それで、お友達になりたいな、って」

「話はわかったけど、あんたよく見てるわね  
まさかアイツの事……」

「にやつ！？　ち、違うよー！」

アリサの妙な勘違いに手をパタパタと振り否定するのは。

「まあ、取り敢えずそういう事なら私達も手伝っわ、ねっ、すずか」

「うん、私達も頑張る」

「二人ともありがとうー！」

.....  
「っ！？」 ..... 何か俺の知らない所で変なことになってそうな  
心配が.....！  
なるほど、コレが氣を感じると言うことか「

違います。

### 第3話 ……あるえ？（前書き）

次の話からキングダムゾンシてると思っています。

### 第3話 ……あるえ？

「如月くん、一緒にお弁当食べよ！」

「屋上に行くから来なさい！」

「みんなで食べた方が美味しいよ」

上から、なのはさん、アリサさん、すずかさん。

あるえー？ 何でこんな事になってんの？

何で昨日より好感度上がってんの？

まさか、昨日、界王拳の練習で調子に乗って9倍にしたからこんな事に……？

いや、絶対ないわ。

てか筋肉痛半端ないッス。

補正的なものがあるからこの程度ですんでるんだよね。

何かごめんね、悟空。

それはそうと、この状況だね。

正直嬉しいけど

「一人で食べるからいい」

一緒に弁当何て食ったら幸せ過ぎてニヤけちまっよ……

「そんな事言わないで行こ！　ね？」

なのはさんがずっと顔を近づけてくる。

らめえええ！　そんな期待の籠もった目でみないで！

「い、いいってるだろ……」

お、俺は一人で食べるから……」

……………〔屋上〕

「いただきますーす」

嬉しそうにお弁当を食べ始めるのはさん。

どうしてこうなった？

今日のなのはさん何時も以上に食い下がって来て、それでも断つて俺に業を煮やしたのか、アリサさんに首根っこ掴まれて屋上に強制的に連れてこられました。

何か強制つてのに縁があるのかな、俺。

「全く、アンタのせいで、時間ギリギリになるじゃない」

「まあまあ、アリサちゃん」

……………さて、ここまで来ちまった以上、もう逃げられないぜ？俺が。

本気出して、無表情にならねばならん……

だけど、嬉しくて、自然と笑みが出そうだよおっかさん……！

「どうしたの？ 如月くん。  
変な顔して……」

はっ！？　なのはさんに見られた！

ニヤけそんな顔を必死に隠して無表情にしようとしてる顔がっ！

ニヤけと無表情の中間みたいな顔って凄い変だよな。

「い、いや、何でもない」

こうなれば、弁当を食うことに集中して、周りを気にかけない事にしよう。

「ねえねえ、如月くん」

「……………」（パクパク）

「如月くん？」

「……………」（むしゃむしゃ）

「あう……………」

ドゴッ！

「うぶっ！？」

「無視してんじゃないわよ！」

な、なんだ！？ 何が起こった！？

弁当に集中してたら横腹に衝撃が走った……

周りを見ると、ちょっと涙目なのはさんと毛が逆立ちそうな勢いでキレてるアリサさん、そしてアリサさんをなだめるすずかさん。

………なんか俺が思い描く事と全く違う事が起こりすぎじゃね？

「やっぱり、迷惑だったかな……  
如月くん」

不安げな表情で聞いてくるのはさん。

ここは、迷惑だと言った方が俺に関わらなくなるんじゃないだろうか  
………

ニコポと言う厄介な物を何とかせんと危険だもんなあ………

やはり、ここは………

「め、迷惑」

「っ！？」

「じゃない」

あれ？

あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

『迷惑で止めようと思ったたら「じゃない」をつけてしまっていた……』

何を言っているかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわかない……

頭がどうにかなりそうだった……

もっとも恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ……

いや、さ。

あんな泣きそう顔見て、冷たく言い放つ事なんて出来なかった……

ちなみに。

【頭がどうにかなりそうだった】

アリスの殺されそうなくらいの鋭い眼光を向けられて。

【もっとも恐ろしいモノの片鱗】

すずかの黒い笑み。

「ほんと？」

「ほ、本当」

ヤバイ、ヤバイ。

なのはさんの涙目上目使いが可愛いすぎて世界がヤバイ。

「じゃあ、お友達になってくれる？」

「うん、なる」

.....。

あ、ありのまま今起こった事を（ry

なのはさんは魔性の女だったようです。

なのはさんの言う事は何でも聞いてあげたくなくなってしまっ.....！

友達承認しちゃったよ!？

「本当!？」

パアツと表情が明るくなるなのはさん。

ふ、ふふ.....

負けたよ.....

きつとコレから無表情を貫き通してストレスがたまる生活が開始さ

れるのだろっ……

それでもいいかなって自分がいて怖い。

## 第4話 瞬間移動

なのはさん達と友達になってから結構月日が立ちました。

俺、三年生。

原作開始まで秒読みだねっ！

そして、誰でもいいから俺をほめて！

今なお、無表情を貫き通している、俺をほめて！！

いやあ、友達になった日から頻繁に四人でつるんでるだけどき、そろそろ限界。

何時も無表情な俺を笑わそうって変な企画が出てきた時はもうゴールしてもいいよね、みたいな感じだった。

俺に忍耐力が結構あつた事に驚きですよ。

あ、ちなみに界王拳が10倍まで耐えられるようになった。

成長するだけで倍数が增えるって……

何か本当ごめん、悟空。

キンコーンカーンコーン

おっと、学校終了のチャイムがなったな。

さて、じゃ、帰

「レンヤ君、一緒に帰ろ！」

ろうとしたらなのはさんに捕まったでござる。

ちなみになのはさんは結構前から俺の事を『如月くん』から『レンヤくん』に呼び方がグレードアップしています

そして、なのはさんの後ろにはアリサさんとすすかさんという何時ものメンバー

しかし、今日は

「用事があるから一緒に帰れない」

ので一人で下校します。

「あ、そうなんだ」

ごめんね、なのはさん。

来るべき原作開始に備えて、修行するよ。

.....  
と、言うわけで来ました。

人気の無さそうな山に。

とりあえず、アレだ、原作開始に備えて、なのはさんの砲撃に対抗できる攻撃を編み出そう。

まあ、対抗するといってもなのはさんと敵対するわけじゃないけど。

ていうか、あの砲撃に対抗するにはピッタリの技あるよね。

かめはめ波だよね。

オリジナリティなくてごめんなちい

ぶっちゃけるとここ数年、気の練習してこれは誰の気かっていうのは分かるようになったりはしたんだけど、気の放出をした事はないんだよね。

まあ、とにかく一度やってみる。

「よし……」

かめはめ、はめ」

「波っ！！」

ポヒュウ……

「何か出た」

スッゴいシケてたけど、かめはめ波できたな……

うん、取り敢えず出来たって事は気の放出の仕方を色々ためせば、かめはめ波出せるはず！

「かめはめ、波っ！」

ボウ！

「かめはめ、はめ、波あ！」

ドオン！

「かああめえええ（若本風に）」

バチッバチバチ……！

「はああめえええ（若本風に）」

ビリビリビリビリ……

「ぶるああああー!!」

ズドオオオオ!!……!!

「どういふことなの」

漫画みたいにしっかりしたかめはめ波が出たけど何で若本風で一番ちゃんとしたのが出たんだ……？

「普通に出せるようにならんと、セルのかめはめ波みたいになってしまいそうだ……」

さて、と。

逃げよう。

空に撃ったとは言え光の柱が昇って行ったのを見た人が来るかもしれないし。

よし、ここは瞬間移動で……

⌋  
⋮  
⌋

ピッ

額に人差し指と中指を当てる。

悟空の瞬間移動ポーズだな。

「コレは母さんの気だな」

ピシュン！

•	•	•
•	•	•
•	•	•
•	•	
•	•	
•	•	
•	•	
•		
•		
•		

「つて出来たらいいのにねえ」

瞬間移動は流石にまだ無理だぜ。

というか母さんは俺がこんな事出来るのを知らないから、母さんの所に瞬間移動とかしないわ

さて、ふざけてないで移動しようか……

## 第5話 原作開始

《助けて》

!?

これは……

ユーノくんとうとう来たか……

「今、何か聞こえなかった？」

なのはさんが言う。

ちなみに今日は一緒に下校中でした。

「何か？」

すずかさんが首を傾げる。

「何か声みたいな……」

「別に……」

「『さようなら、天さん、どうか死なないで』くらいしか……」

「それ、聞こえたの!？」

「ていうか、あんたが冗談言っただの初めて聞いたんだけど……」

そっぴゃ、いつも冗談とかネタは心の中で言っただけだ……

《助けて!》

「!?! やっぱ聞こえる!」

そう言っただのはさんは駆けていきました。

とうとう、原作開始かあ……

どうしよう、俺、舞空術昨日覚えたばかり何だけど……

いや、別にいいか。

なのはさんを追いかけてフェレットっぽい、生き物を発見。

「怪我してる……」

「取り敢えず獣医さんに見せよう」

「う、うん!」

……  
で、結局ユーノくんの怪我はそんなに大した事もなく、獣医さんに預けてみんな家に帰りました、と。

今日の夜かなのはさんが魔法少女になるのは……

んー、まあ、うん。

取り敢えず、再びユーノくんの声が聞こえるまで寝てようかな……

………  
《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

再び、声が響く。

「昼間の声と同じ声……」  
なのはが声に反応する。

《聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願いです！  
僕に少しでも力を貸してください！》

「あの子が喋ってるの？」

そして、なのはは昼間助けたフェレットの下へと行くのだった。

【その頃の如月くん】

《聞こえますか？僕の声が、聞こえますか？》

「ううん……ブルータス、お前もか……ムニャムニャ」

見事に夢の中だった。

しかも変な夢を見ている。

《聞いてください

僕の声が聞こえるあなた、お願いです！

僕に少しだけ力を貸してください！》

「ん……オラに、元、気を……分けて、くれえ……」  
今度は元気玉を作っているのだろうか。

そして、そのまま朝を迎えるのだった。

- - - - -

チュン、チュンチュン！

「小鳥のさえずりが朝だと知らせる……」

ふう……

普通に寝過ごしたぜ

まあ、いいか。

何とかなるでしょ。

取り敢えず、学校へ行こうか。

………

学校へ行くと、なのはさんがフェレットを飼うことにしたという話を聞いた。

なのはさんは無事、魔法少女リリカルなのはにランクアップしたようです。

授業中なのはさんきつとユーノくんと念話で話てるんだろうなあ、とか思いながら、1日は過ぎていきました。

・

・

・

で。

「それを渡して下さい!」

こうなると。

どうして、こうなったんだろう……

えーと、確か……

学校が終わって、いつものようにもは当たり前のような感じで皆と下校して、家に帰り、ブルータス（ニコポ被害にあった猫、メス1話参照）が外でニャーニャー言ってるから何かと思って見てみたら

くわえてた。

何をつて？

宝石種。

通称ジュエルSEED。

何か違う気がするがまあいいだろう。

いや、ビビったね、ブルータス（猫）がまさかジュエルシードくわえてるとかね。

慌てて取り上げたよ

ジュエルシードが発動しちまったらヤバいからね

まあ、ブルータスは願いが無いのか知らんが発動しなくて良かった。

んで、もし発動してもいかなから急いでこの間、かめはめ波の練習をした山に来た。

そしたらね、みんな大好き『フェイト・テストロッサ』さんが現れました。

アルフさんを連れて。

正直ジュエルシードはフラグかと思ったんだが、ガチだった。

どうしよう……

初めて会う魔法少女がフェイトさんとか想定外だった……

## 第6話　なんかよく分からない内に初戦闘（前書き）

私「如月くんのオッドアイって何色と何色なの？」

煉夜「ん？　緑色と紫色

紫色とか……ラムダでもいるんじゃないのって感じだよな……」

## 第6話　なんかよく分からない内に初戦闘

「これは危険な物だぞ？　分かっているのか？」

フェイトさんに言ってみる。

「……………」

「いいから渡しな！」

フェイトさんにだんまり決め込まれました。

お兄さん泣きそう。

あ、同い年か。

アルフさんがグルルルと唸ります。

はつきり言って怖いです。

これを危険な物とか言わなければ一般人として接してくれてたかもしれないね、失敗した（・>）

「た……………」

「？」

「タツカラプト・ポッポルンガ・プピリット・パロ！！」

「は？ あんた、何言ってる……」

俺も一体何を言っているのk

ビリビリビリビリ！！

「な！？」

いきなり俺が持っていたジュエルシードが発光しながら震えだす。

何だ？何だ！？

俺は慌ててジュエルシードを放り投げる。

ピシャン！！ ゴロゴロゴロ……

何かいきなり空が暗くなって雷とか鳴り出したんだが。

バシユウウウ！！

そして、ジュエルシードから光が昇り……

《私を呼ぶ者は誰だ……？》

何か出てきた。

「な、なんだいコレは！？」

あ、あんた何したのさ！？」

「ジュエルシードは実はナメック星のドラゴンボールだったって新  
たな説が生まれたな」

慌てるアルフさんに言う俺。

まさか、ナメックの合い言葉でジュエルシードからポルンガ出てく  
るとか完全に予想外だわ、しかも一個だけで出て来るとかドラゴン  
ボール涙目。

まあ、ポルンガに似てるの顔だけだな。

動体とか龍ってか竜だし。

足あるし。

そして、俺はテンパリ過ぎて逆に冷静になってるし。

ヤバイ、俺の余計な一言でどんどん混沌になっていく……！

《さあ、願いを言え》

え、願い叶えてくれるの！？

「ね、願い？」

フェイトさんが放心した感じで言う。

そうだよね、いきなりこんなん出て来たら誰でも驚くよね。

だが、願いを叶えてくれるなら好都合だ。

今こそ俺の願いを……！

「俺のニコポ、ナデポをどうにかしてくれ！」

本当に願いが叶うなら俺は外で存分に笑える！

《それが願いか……  
いいだろう、叶えてやろう……ただし》

ん？　ただし？

《私を倒す事が出来たらな！！》

「どついうことだぜ」

.....  
よく分からない内に戦闘が開始し、10分くらいたちました。

《ちょこまかと！！》

ポルンガ（仮）の口から火球が放たれます。

「界王拳3倍！！」

それを界王拳の倍率を上げてかわします。

実はさっきからこんな感じで逃げ回ってます。

え？　だらしねえな？

はっはっはっ、よく考えてくれよ、確かに界王拳とか気とか扱えるけどさ、これまで普通の小学生だったんだぜ？

そんな奴が戦闘訓練とかすっ飛ばしていきなり実戦出来ると思う？

まあ、そんな事言っただけでは何も始まらないから、覚悟決めようか。

あ、ちなみにフェイトさん達は放心してるフェイトさんをアルフさんが人型にトランスフォームして抱えてどっかいきました。

丸投げとか。

《ぬん！》

ポルンガ（仮）は尻尾を振るい、俺に迫る。

「4倍！！」

それを確実に物理法則を無視した動きでかわし、ポルンガ（仮）の背後に回る。

界王拳って色々凄いやね。

「くらえ！ 完全に界王拳頼りの蹴り！！ 8倍！！」

《ぬっ！？ グオオオオ！？》

ズドオオオオン……！！

いやあ、スッゴい吹っ飛んで行ったよ。

界王拳スゲエ。

《おのれ、こしゃくな！》

あれで決まるとは思ってはないけど、そこまでダメージはなかった  
っぽい。

ならばアレで決める！！

俺は両手を右腹辺りに持って行き気を溜める。

「か、め、は、め……」

俺の構えを見て、ポルンガ（仮）が身構える。

「波っ！！　とても思ってたか！！」

かめはめ波を撃たずにポルンガ（仮）の眼前へとかつ飛び拳を振りかぶる。

《ふははは！！　飛んで火にいる夏の虫だ！！》

ポルンガ（仮）は俺めがけ火球を放つ。

俺は迫り来る火球にぶち当たった……りはせず、火球は俺をすり抜けどこかに飛んで行った

《何！？》

「残像だ」

ポルンガ（仮）の真横に現れ

「波あああ！！」

先ほど溜めたいた、かめはめ波を放った。

……  
うーん。

能力チートだけかと思ったら、思いの他ボディもチートだったっぽ

い、残像拳出来るとかマジ胸熱。

《よくもやってくれたな……》

さて、このポルンガ（仮）はどうしようかな……

8倍界王拳かめはめ波は大分効いたみたいで地面に倒れてるんだが

……

「勝った……よな？」

本当に願いを叶えてくれるのか？」

《ああ……

私に勝ったのだ、願いは叶えてやろう》

マジか、マジなのか……！

「じゃ、じゃあ、さっきも言ったように、俺のニコポとナデポをどうにかしてくれー！」

《………》

わくわく

《………》

ドキドキ

《……………ム》

な、何だ？

もう願い叶った？

《残念だがその願いは神の力を大きく超えている。  
叶える事は不可能だ》

「なん……………だと？」

そん、な……………

ば、バカな……………

はっ！？ そうか……………

このニコポ、ナデポを与えてくれやがったあのじいさん……………

最高神って言ってたよな……………

つまり、このポルンガ（仮）の言っている神が下級神だろうが中級神だろうが上級神だろうが、そのさらに上に行く最高神の力を超えない限りジュエルシードで願いは叶わないって事？

くそお……半端に頂点立やがって……

何が最高だよ再婚しろコラああああ！！

ふう、ちょっと落ちつこうか……

《別の願いにするか？》

「保留って出来る？」

他の願いが決まった時にまた喚びたいんだが」

《いいだろう……》

では、さらばだ！》

そう言つて、ポルンガ（仮）は光を発し、収まった時には封印状態になったジュエルシードに戻っていた。

残念だが……

まあ、何とかなるさ！

うん、多分！！

最近、無表情にもちよつと慣れてきてるしね！

大丈夫、大丈夫

ガサガサっ！！

ふおう！？

な、何だ？

動物

「レンヤ、くん……？」

「な、なのは……さん？」

なのはさん登場おお！？

え、まさか見られてた？

い、いやそんな事は……

「ごめんね、レンヤくん  
ずっと見てたの……」

さっきの……何？」

＼（＾Ｏ＾）／

界王拳（その他諸々）バレた！

## 第7話　オハナシ（前書き）

例えばさ、もう自分（如月くん）の事を好きな子にはニコポ、ナデポは効きませんみたいなのはどうだろう。

## 第7話 オハナシ

- 数分前 -

コロコロコロコロ……!!

「ふええ！？ な、なにになに！？ 何でいきなり暗く……！」  
も、もしかして……」

「なのは！ ジュエルシードだ!!」

いきなり暗くなった空に驚くなのはにユーノが叫ぶ。

「や、やっぱり……」  
行かないや!」

なのははジュエルシードの下へと走りだしたのだった。

……  
「すぐそこだよ、なのは!」

『~~~~~!!』

『~~~~~!!』

ジュエルシードに近づくとつれ、物音や喋り声が聞こえてくる。

「誰がいる……？」

なのはは走るのを止め、ゆっくりと近付き物音の方を見る。

《ぬん!!》

『4倍!!』

そこにいたのは、どこかで見たような顔をしている大きな竜と戦っている、なのはのよく知る友達だった。

「う、嘘、レンヤ、くん？」

「あ、あの子は一体……  
なのはの知り合いなの？」

ユーノが驚きながらなのはに聞く。

「う、うん、赤いオーラ？　みたいなの出てるけど、レンヤくんだよ、私の大切なお友達」

なのはが答える。

ちなみに赤いオーラというのは界王拳を発動したら出るアレである。

『くられ！　完全に界王拳頼りの蹴り!!　8倍!!』

《ぬっ！？　グオオオオ！？》

煉夜の蹴りで竜が吹き飛んで行く。

それを見たのはは

「界……王拳……？」

今、界王拳って言った！？」

目を丸くしながら驚き

そして煉夜が右腹辺りに両手を持って行き、あのポーズを決めた時

「噓、あれって……」

『か、め、は、め……』

「……………」（ドキドキ）

かめはめ波を期待するなのは。

『波っ！！　とでも思ったか！！』

だが煉夜は撃たずに竜の眼前へと飛ぶ。

「や、やっぱり、そうだよね……」

流石に撃てないか、とちよつとガツカリするのは。

《何！？》

『残像だ』

『波あああ！！』

「ざ、残像拳なの！？ かめはめ波なのー！？」

立て続けに驚愕するのは。

それにしても女の子なのに技をよく知っているものである。

「あ、あれは、魔法？

い、いや、魔力じゃない……

な、何だアレ？」

気です。

……と、言うようになのは結構前から見ていたのだった。

- - - - -

「つまり、カクカクシカジカシカクイムーブって訳なんだ」

俺はなのはさんにポルンガ（仮）が現れたいきさつを話した。

「え、えっと、それより何でドラゴンボールの技が使えるのか知りたいの」

それより！？ それよりつつたよ！？

ジュエルシードエ……

さて、どうしたものか……

「え、えっと、界王拳自体は生まれた頃から使えてたんだ、かめはめ波とかは、しゅ、修行？ そう修行」

修行らしい修行なんかせずに習得しちゃったけど。

「……………」

「な、なのはさん？」

え、だんまり？

こ、怖い、凄く怖い！

まさかOHANASIフラグ？

「す」

す？

「すごい！　すごいよ！」

え？

何が？

「界王拳やかめはめ波が使える何てすごいの！！」

そうか……

そうだね、全く知らない技とかならまだしも、この世界ドラゴンボール存在するもんな、かめはめ波とか使えたらある意味英雄みたいな感じかもしれない。

ていうか、目をキラキラさせてるのはさん可愛い。

「生まれた頃から使えるって……  
レアスキル……なのかな……？」

足下で呟くユーノくん

そう言えばいたんだった。

身体能力やら何やらを耐えられる限り倍々に出来るレアスキルとか管理局に目つけられたりしないよな？

俺、界王拳を100倍まで上げる事が出来たらハンドレットパワーにするんだ。

「あ、そういえば」

なのはさんが思い出したようにいう

何でしょう？

「ニコポとナデポってなに？」

それか――！

や、ヤヴェ……

どう説明すれば……

「え、えと……

く、癖？ そう――！ 癖だよ――！」

「クセ？」

小首を傾げるなのはさん

「そう、癖だよ、困った癖でね、はっ！――」

「？ いきなり後ろ向いてどうしたの？」

あつぶねえ――！

ノリで笑う所だった……！

セーフ！ ギリギリセーフ！！

「大丈夫だ、何でもない」

「そう？」

さて、うん。

どうしようかな。

第8話 瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？（前書き）

この小説、日間ランキングで一位になりますター

初めて一位になったよ。

さて、今回はあんま進展ないです

如月くんが移動術覚えるくらい。

## 第8話 瞬間移動かめはめ波って防ぎようなくね？

ピッ

俺は額に人差し指と中指を当てる、悟空の瞬間移動ポーズだ。

「うーん、なのはさんの戦闘力は……3くらい？」

別に瞬間移動しようとした訳じゃなくて、ただ気を探ってみただけだったりする。

「ひ、低い……！」

ガンとショックを受けるなのはさん

「いやいや、なのはさん、悟空とかを基準に考えてるかもしれないけど、よく考えるんだ、ラディッツが初めて会った地球人のおっちゃんがいただろ？」

あの大人であるおっちゃんですえ戦闘力が5だったんだ、3も十分だと思うよ」

まあ、スカウターがないから、俺の勘だけだね

しかし赤ん坊の悟空の戦闘力が2ってことは赤ん坊にしちゃめっち

や強いって事だよな。

というか、何故俺がなのはさんの戦闘力を測っているのかと言うとあの能力バレした日から数日たち、俺となのはさんとユーノくんは一緒にジュエルシード集めをしているんだが……

ふと、なのはさんが「私の戦闘力って幾つくらいなんだろう」って呟いたため、こんな状況になっていたと。

「なのはさんは気よりも魔力の方がデカいし、魔導師戦で戦闘力はそんなに関係ないと思う」

「そっかー」

ていうか、結構前から思ってたが、この海鳴市って何か気がデカい奴何人かいるんだが

その内二人がなのはさんの家にいるんだよな

完璧にあの人達だよな。

今思ったが、フェイトさんの気を探ればどこにいるかわかるよね

「レンヤくん、レンヤくん」

「ん?」

なのはさんが何か期待したような眼差しで俺を見る。

え、なに？

「瞬間移動はできないの？」

……………くっ！

ごめんよ、なのはさん……  
流石に瞬間移動は……

しかし、わくわくした表情をしているなのはさんを見ると、出来るんじゃないかって力が湧いてくるね。

「ちょ、ちょっと待ってて」

「あ、うん」

俺はなのはさんからは見えない位置まで移動する。

「さて……………」

再び額に指を当て、なのはさんの気を特定する。

別に額に指を当てなくても気は探れるんだが、何か格好いいし。

「瞬間移動、瞬間移動……」

俺は今なのはさんの喜ぶ顔がみたいがために瞬間移動を覚えようとしている……

なんだろう、なんか複雑な気持ち。

まあいいや、集中集中……

正直どうやるか分からないけど……

頼むぞ、俺のチートボディ！

むむむむ……！

なのはさんの気と俺の気を合わせるかのように……

なのはさんの気を手繰り寄せるかのように……！！

跳べ！

跳べよおおおお！！

ピシュン！！

「え？ わっ！！ レンヤくん！？」

「……………出来た？」

なんか、某鳳凰院みたいなテンションになったら出来た。

「もしかして、今のが瞬間移動！？  
すごいー！！」

「て、転移？」

なのはさんがはしゃぎ、ユーノくんが驚く。

ユーノくんいたんだね

「なのはさんのためにたった今瞬間移動を覚えたよ」

流石チートボディ。

度々言ってるけど、悟空、本当にごめん。

「え？ 私の、ため？」

「い、いや、何でもない」

「そ、そう」

なのはさんの顔がちよつと赤い。

ヤバい、何か主人公みたいな事してしまった……！

しかし、コレで瞬間移動かめはめ波が出来るようになったのかな。

ヤバいな、どんどん魔力の必要性がなくなっていく。

てか魔力より気の方が効率いいんじゃないかと思えてきた。

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！（前書き）

アンケート的な何かを取りたいと思います。

感想で魔力SSSもいらないうて意見があつたので。

？魔力をSSSじゃなく、DかCくらいに落として、新たなチートがなすりつけられる。

？そのままでもいい。

よろしくお願いします

第9話　ぶ、ブルータス！　ブルータスじゃないか！

皆さん、どうも、如月です。

今日はすずかさんの家に招待されたので来ています。

しかし、アレだ。

ハッキリ言って、女の子3人の中に男である俺がいる時点で結構まずいのに、女の子の家に行く勇氣なんぞ持ち合わせておりません。

なのに来ている理由は

止まっていました。

何がって？

リムジン。

俺の家の前に。

わけがわからないよ、と疑問に思っていると、中からアリサさんが現れ

「あんたの事だからまた妙な理由つけて来そうにないから迎えに来てあげたわ！」

って、胸張って言われてしまい、断れなかった。

そういう訳で月村邸にお邪魔させて貰った訳だが

「どういう事なの」

「「「ニヤーニヤー！」」「」

何かまとわり付かれてるんだが……

「これはまあ、なんというか……」

「うちのネコ達みんな……」

「レンヤくんにつっ付いてるの」

何故？

にこりともしてなければ撫でてもないぞ!?

まさか、俺は実は猫に好かれ安いのだろうか……

まあ、すずかさんの家の猫が人になれてるってのもあるんだろうが……

「そんなに懷かれてるんだから、撫でてあげなさいよ」

懷かれてるってかじゃれつかれてるって感じでもない。

しかし

「俺が撫でたらすずかさんちの猫はみんな俺の虜になってしまっぞ」  
「？」

「何言ってるのよバカ」

ひどい！

「最近、煉夜くん、よく冗談を言うようになったよね」

すずかさんが言う。

実は冗談じゃないんですよ……

さて、どうしたものか

と、考えた瞬間

「フニヤアアア!!」

「「ニヤツ!?!」」

一匹猫が飛び込んで来て、俺にまとわりついていた猫を追っ払う。

こ、この猫は!?!

「あれ? この子うちのネコじゃないよ?」

「どこから紛れ込んできたのかしら?」

「ブルータス(猫)! ブルータスじゃないか!」

「「え?」」

何故こんな所に……

「ニヤーン」

俺に飛び付いてくるブルータス

「お前、何でここにいるんだ？」

「ニヤンニヤン、ニヤニヤン、ニヤーン!!」

「暇だったから追い掛けて来た？」

家からここまで結構距離あるのによく来れたな」

「ニヤン！」

「か、会話してる」

なのはさん達が驚いているが別に会話してる訳ではない。

ただそれっぽい事を言ってるんじゃないかね？っていう俺の勝手な解釈である。

でもブルータスを見るとあながち間違いではないような気がする。

.....

さて

「正直、俺はここにいてはいけないような気がしてならないんだが」

俺にはガールズトークなんてぶっ潰してやろうぜ!! みたいな勇氣はないよ。

「気にすんな」

「アリサさん……」

そんな男前な事を……」

そんなキャラだったわけ？

でもまあ、紅茶は美味しいし、お菓子も美味しいし、悪くはないよね。

猫撫でたいのに撫でれないのが残念だが

そんな感じで、三人の話聞いて、時折相槌をうったりしてのほほんと過ごしていた。

が。

「!？」

なのはさんが驚いたように目を大きく開く。

《なのは!》

《うん、すぐ近くだ》

ユーノくんとなのはさんが念話で話します。

そうだったな、ジュエルシードが近くにあるんだっけ。

《どうする？》

ユーノくんがなのはさんに問う。

《え、と……

えーと……！》

なのはさんはアリサさんとすずかさんを見て悩む。

《そうだ！！》

「ユーノくん？」

ユーノくんがなのはさんの膝から飛び下り駆けていく。

「あらら？ ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも、ちょっと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

すずかさんが聞くが

「大丈夫、すぐ戻ってくるから待っててね」

なのはさんはそういつて走って行く。

《なのはさん、二人は俺に任せて》

《！！ う、うん、ありがとう！

念話出来たんだね》

散々念話を聞いてたからなんか感覚的に出来たよ。

「ユーノくんはなのはさんに任せて、俺達はドラゴンボール談議で  
もしか」

「なんでよ」

「あはは、ごめんね、私よく知らないんだ」

「それはいけない、今度全42巻を貸そうか？」

「やめい！」

アリサさんに止められました。

さて、そういえばなのはさんとフェイトさんが初めて遭遇するんだ  
ったっけ？

なのはさんとフェイトさんの戦いには下手に首突っ込まないほうが  
いいだろうな。

アルフさんとは戦っけどね。

第10話 湯煙温泉……ポロリもあ「ねーよ（前書き）

アンケート結果。

?になりましたー

（  
（

## 第10話 湯煙温泉……ポロリもあーねーよ

あの後、なのはさんはフェイトさんと無事遭遇したみたい。

アリサさん達と話をしながら気を探ってて遭遇したのは分かったけど、アルフさんの気がなかったなあ……

原作もこの時アルフさんいなかったんだっけ？

正直9年も原作を見ていないと、殆ど忘れてしまっただが。

転生系の二次創作ってオリ主はずっと原作覚えてたりするけど、凄いい記憶力だ。

もしかすると、記憶チートなのかもしれない。

まあ、それはそうと、しばらくして、フェイトさんの気が離れて行き、なのはさんの気が少し弱々しくなったため、アリサさんとすずかさんにはなんやかんや言って、迎えに言ってみると、地面に倒れているなのはさんを発見。

急いで連れて帰りました。

そして、その日からなのはさんはフェイトさんの事で悩みだした。

.....  
と、言う訳で、温泉に来ました。

なのはさんに誘われたんですね

「お父さんとお兄ちゃんが是非おいでって」

.....さて、界王拳の限界を超えようかな。

20倍かなあ、いや、30倍.....

だがしかし、現実逃避しても意味がなかった。

「こうなれば後は野となれ山となれ」

まずはみんな温泉に入るようだ。

女子率高いよな、本当。

《レンヤ！ 助けてー！》

ん？ ユーノくんから念話が来た。

ユーノくんの方を見ると、女湯に連れて行かれてました。

……うらやましい。

だが、助けを求めているならば答えようか。

「なのはさん」

「ん？ なーに？」

「ユーノくんプリーズ」  
手のひらを差し出し言う。

「ダメよ、ユーノは私達と入るのよ！」

アリサさんに遮られました。

「ユーノくんは男だぞ？ ここは俺達と男湯だろう？」

「ユーノは動物じゃない」

「ですよー」

《ええ！？》

ごめん、ユ一ノくん。

強く生きて。

《レンヤ！？ レンヤああああ……！》

連れてくれました。

「さて、煉夜くん  
俺達も入るか」

ポンと俺の肩に手を置き言つ、土郎さん

そして、その後ろには恭也さん。

詰んだ。

- - - - -

カポーン。

ふう、いい湯だ。

さて、上がるか。

「どこに行くんだい？ 煉夜くん、しっかり温まらないと」

ダメでした。

引き止められたので、再び湯船につかる。

「さて、煉夜くん、ちょっと聞きたい事があるんだけどね？」

士郎さんが言う。

「最近、なのはが……」  
ガクブル

「キミの事をよく話すようになったんだが、どうしてかな？」

！？

ば、バカな……！

士郎さんの気が膨れ上がった、だと？

「それに、最近キミとなのはは一緒にいる事が多いが……  
何をしているんだ？」

！！？

そんなバカな……

恭也さんの気も膨れ上がった……

二人の気がどんどん上がっていく……！

お、俺の界王拳10倍でも勝てるかどうか……

「あ、ああ……」

気分はベジータ

も、もうダメだ、おしましだぁ……

ブクブクブクブク……

「ん？　れ、煉夜くん？」

「た、大変だ、のぼせて気を失ってる！」

ベジータの気持ちがよく分かりました。

## 第11話 寝過ごしはダメだね（前書き）

さあて、壁にぶち当たったぞ……

英語のテストが10点未満を貫いて卒業した私にデバイスの台詞は難しすぎるぜ……！

まあ、普通に会話する分には日本語でいいよね。  
ちなみにピシユンと言う効果音は瞬間移動した音ですのよろしく。

## 第11話 寝過ごしはダメだよ

.....ん？

あれ、ここは.....

.....ああ、そうか！

高町親子の戦闘力にあてられて気を失ったんだった

ハハッ、すげえ真っ暗

.....もう、夜じゃん。

温泉の思い出が恐怖で震えた事ってどういう事だよ。  
そして、どうして俺は気絶から睡眠に移行してたんだよ！

確かここにもジュエルシードあったよな？  
そして、フェイトさんも来るんだよね？

完全に寝過ごしてる気がしないでもないが.....  
ちょ、ちよつとなのはさんの気を探ってみよう

……ん？

旅館の外にいるな、しかもフェイトさんの気もある。

もしかして、バトル中？

ちよつと行ってみるか。

ピシュン！

- - - - -

場面が変わり、なのはVSフェイト。

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Thunder Smasher》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Divine Buster》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、デイバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合い、拮抗する。

「レイジングハート、お願い！」

《all right》

レイジングハートはなのはの言葉に応え、デイベインバスターの出力を増加させる。

その結果、なのはのデイベインバスターがフェイトのサンダースマッシャーにうち勝った。

「！」

「なのは……強い！」

ユーノが感嘆する。

「でも、甘いね」

そんなユーノにアルフが言う。

《Scythe Slash》

「なのは！！」

ユーノが叫ぶ。

「！？」

なのはが上を見上げると、バルディッシュをサイズフォームにしたフェイトが接近していた。

ピシュン！

瞬間移動でやって来ると、上空でフェイトさんがなのはさんの首もとにサイズフォームのバルディッシュを突きつけた状態で止まっていた。

も、もう決着ついてるな……

これは正直、下手に動けない。

「レンヤ！」

背後からユーノくんの声。

「ユーノくん、すまない、大分遅れたようだ」

「ちっ、新手……ってあんたはあの時のボウズ……！」

アルフさんが驚いている。

神龍騒動ですね。

「！ レイジングハート！ 何を……！？」

なのはさんの方を見るとレイジングハートがジュエルシールドをフェイトさんに差し出している所だった。

「主人思いのいい子だね」

フェイトさんはそう言い、ジュエルシールドを手に入れ、地上に降りて来る。

「帰ろう、アルフ」

「さっすがアタシのご主人様  
じゃあね、おチビちゃん！」

アルフさんが狼から人に変わり、フェイトさんと歩いて行く。

「待つて！」

だが、なのはさんが歩き去っていくフェイトさんを止める。

「名前……」

あなたの名前は？」

「フェイト……フェイト・テストロッサ」

フェイトさんはなのはさんの問いに答え

「私は……！」

なのはさんの言葉を最後まで聞かず、飛び去って行った。

「……………」

なのはさんはフェイトさんが去って行った方を静かに見つめていた。

「なのはさん、フェイトさんとはきつとまた近い内に会うことになる。」

元気だして「

「……………うん、ありがとう、レンヤくん」

さて、もし士郎さん達がなのはさんがいないのに気付いたら俺がわりとマジでヤバいので、そろそろ帰ろうか。

「旅館に帰ろう。」

瞬間移動するから俺に掴まって「

「……………うん」

……………

【以下、オマケと言うかボツ】

月をバックに二人の魔法少女が戦っている。

《Thunder Smasher》

フェイトのバルディッシュから遠距離砲撃魔法が放たれる。

《Divine Buster》

それに応じ、なのはのレイジングハートからなのはの主砲、デイバインバスターが放たれる。

二つの砲撃がぶつかり合う、と思った瞬間。

ピシュン！

サンダースマッシャーとデイバインバスターの射線上に煉夜が現れた。

「え？」

「！？」

「ええええ！？」

上から煉夜、フェイト、なのは。

チュドーン！！

「うばああああ！！！」

「レンヤクーーーーん！？！」

ちょっとふざけ過ぎたのでボツりました。

## 第12話 豆……？

「ニヤーニヤー」

ガリガリガリガリ

朝、ブルータスの鳴き声と何か削ってる音で目が覚めると。

枕元に……

「何だこれ」

何かあった。

「箱……？ ブルータス、何これ？」

「ニヤー？」

さあ？ って感じに首を傾げる、ブルータス。

ふむん、えーとなになに？

箱を手に取り、箱に書かれた文字を読む。

「×豆作りセット？」

って書いているが……

何豆が分からん、豆の前に何か漢字があるんだが、ブルータスの爪痕で削れて読めねえ。

一体誰が置いたんだ？

誕生日って訳でもないし、両親からのプレゼントとかならクリスマス以外は直接渡してくるだろ？

取りあえず箱を開けてみると。

「種と、何か少し青みがかった液体」

セットって言うからいっぱい入ってんのかと思ったら二つだけって。

よし、ちょっと、植えてみようか。

- - - - -

だがしかし、今日は学校だった。

学校から帰ってにしようか……

しかし、気になるんだが。

聞いてみるか……

「母さん」

「あら？ レンくん、どうしたの？」

初登場、俺の母親（26歳）。

ちなみに父親はもう仕事に行ってる。

「今日学校休んでもいいかな」

「どうして？ 具合悪い？」

「気になる事を追い求める年頃だからさ」

何言ってるんだ、俺。

「……………」

母さんがジッと俺を見つめる。

やっぱダメ？

「そう、そっか……」

レンくんももうそんな年頃か……

うん、いいよ、学校にはお母さんが電話しとくね」

何か、成長した息子を見て、嬉しいような、どこか寂しいような、そんな表情をして言う母さん。

何かノリいいな。

「え、てかズル休み、承認？」

「うん、でも今日だけだからね」

ニコニコしながら言う母さん。

相変わらずのほほんとしてる人だな。

まあ、うん。

じゃ、ちよつと庭に行つて種を植えてみるかな。

- - - - -

とりあえず庭の隅の方に植えてみるかな。

「へへ、この土ならいい豆が育つぜ」

プスつと土に穴を開けて……

種を入れて、埋めて、謎の液体を垂らしてみる。  
ポチャ、ポチャつと。

……………。

ニヨキ

！？

もう芽が出た！！

ニヨキニヨキニヨキニヨキ……

凄い勢いで成長してる……

ふむ、莢豌豆みたいなのが出来たぞ。

とりあえず収穫。

莢に入ってる豆を一粒取り出してみる。  
何か、既に完成した大豆っぽい豆が出て来た。

……これって、まさか……？

いや、そんな馬鹿な。

……ちょっと、食べてみるか。

パクツと。

ドクン！！

「！？ うっ……」

な、何だ、力が湧いてくる……？

こ、これはやっぱり……

さ、さっきの箱！

箱を調べてみよう！

部屋に戻り、種と液体の入っていた箱を調べると。

「ん？ 手紙？」

手に取り読んで見ると……

【久し振りじゃな、元気にしてるかの？

最近、最高神（笑）と言われて軽くへこんでる最高神じゃよ。

いやあ、数年振りにお主の事を天界から覗いてみたんじゃが、ワシが与えた能力のせいで苦労してるようじゃの。

そのお詫びと言ってはなんじゃが、お主に特製仙豆セットをやるっ。

まあ、お主に与えた能力があれば、仙豆なんぞ別に必要ないんじやが、持っておいて損はないじやろ。

それでは、コレからも頑張ってくれ】

じいさん……

こんなんよりニコポとナデポをどうにかしてくれよ！！

今でも十分チートなのに、仙豆って……

回復チートも追加された！！

数に限りがあるチートではあるが……

うっん……

……あ、仙豆でいい事を思いついたぞ。

俺の思惑通りになるかは分からんが……

やってみる価値はあるな。

### 第13話 瞬間移動の便利さは異常

ピッ

額に指を当て気を探る。

誰の気を探っているかというと、プレシアさん

いや、仙豆を作りながらドラゴンボールの事を思い出してたら、悟空って、地球から界王星に瞬間移動したり、天界から界王神界に瞬間移動してたから、プレシアさんの気さえ見つければ時の庭園に瞬間移動出来るんじゃないかね？って思ってた。

だから探してるんだけど……

プレシアさんの気を感じた事がないから分かんねえ。

飛びきりデカイ気とかなら分かるんだが、プレシアさんって気は多分大きくないよね？

うーん、フェイトさんに連れて行ってもらった……いや、ダメだな。

敵もしくは邪魔者って思われてそうだし……

うーん……

と、考えていると。

《レンヤくん？》

なのはさんから念話が来た。

ちよつとびつくりした。

《どうかしたの？　なのはさん》

《よかった、元気そうだね》

「元気そう……？」

ああ、そうか、今日学校休んだんだった。

《ズル休みだったからね》

《ええ！？　ズル休みだったの！》

《いやあ、仙豆作って》

《仙豆！？》

なのはさんが驚いている。

まあ、ドラゴンボール知る方には仙豆ってとてつもない物って分かってるだろうしなあ……

《レンヤくんって仙豆も作れるんだ……》

《うーん、まあ、そういう事になるのかな？  
数に限りはあるけど》

《す、スゴいね》

あ、そうだ、私とユーノくん、これからジュエルシードを探しに行くけど、レンヤくんはどうする？《

そうだな……

《今回は俺、別の場所を探してみるよ  
あ、見つかったら呼んで》

《うん、わかった！》

よし、それじゃ行ってみようか。

……全然見つからない！

もう夜だぜ？

そりゃ、簡単には見つからないだろうけど。

あと、今日学校休んだから人が沢山いる所は探せないんだよな。

クラスメイトや先生に鉢合わせたら面倒くさいしね。

まあ、なのはさん、アリサさん、すずかさん以外の人達には俺空気扱いだけどね。

それに美少女三人と一緒にいるから敵意の眼差しを受ける事もあります。

あれ、目から汗が……

しかしまあ、相手は小学生だからね

あまり気にはしない。

ま、そんな事よりジュエルシードだな。

連絡もないし、なのはさんの方も見つからないのかな。

ふう、ジュエルシードにも気があればなあ……

……あ。

そうだよ、ナメツクの合い言葉を言いながら探したら見つかるんじゃないの？

い、いや、いかん、頭の可哀想な子に見られてしまう……

というかそれ以前にそれで見つかったら毎回神龍と戦わなきゃいけないじゃないか……

どうしたものか……

ピシャーンー！

ゴロゴロゴロゴロ……

おおー！？

雷！？

まだ、合い言葉は言ってないのにポルンガ（仮）出てきたのか！？

……… って、違うようだ。

何だ？ 街の方に雷雲が……

まさか……！

ピシユン！！

………シュッ！

「レンヤくん！」

「なのはさん、これってもしかしくなくても」

瞬間移動でなのはさんの近くに来ると、ジュエルシードの光が空へと昇ってました。

「うん、あの子もいるみたい」

《なのは！ ジュエルシードをあの子達よりも先に封印して！》

ユーノくんの声が頭に響く。

《うん、わかった！》

なのはさんのレイジングハートに光が集まりジュエルシードに放とうとする。

が、それよりも一瞬早く遠くのフェイトさんのバルディッシュから黄色い光が放たれる。

「!!」

それを見てなのはさんが驚くが、すぐにレイジングハートからもジュエルシードへとピンクの光が放たれる。

距離的な問題もあって、二つの光はほぼ同時にジュエルシードに当たった。

「リリカル、マジカル!!」

ジュエルシード、シリアル19、封印!!」

その言葉と共に光が太くなり、ジュエルシードに当たる。

フェイトさんの方も同じように光が太くなっている。

二つの光がぶち当たり、何かスゴい無理矢理な感じがするけど、ジュエルシードは封印状態になり空中に留まっている。

「ま、まあなんだ……」

さっさと、取っちまおう!」

俺は空中に浮かぶジュエルシードに手を伸ばす、が。

「そうはさせるかい!!」

その言葉と共に狼状態のアルフさんが思いっきり口を開けてこっち

に飛びかかって来た。

「おわっ！！」

ドスン！！

構図、巨大な狼にのしかかれてる俺。

.....。

「おわあああ！？ か、界王拳！！！」

「なっ！？」

界王拳を発動し、飛び退く。

こ、怖え.....

狼状態のアルフさんって近くで見ると怖いんだよ！

「何だい？ 今のは？」

アルフさんが聞いてくる。

「界王拳だ、詳しくはドラゴンボールを読め」

あえて何巻かは教えない。

そもそも教えた所で、見ないだろうしね。

さて、フェイトさんも来たな……

よし。

ピシュン！

「あ……！？」

「なっ、速い！？」

俺は瞬間移動でフェイトさんの目の前に現れる。

流石にフェイトさんも驚いたみたいだな。

だがその驚きを待っていた！

驚きで少し開いたフェイトさんの口に、持って来ていた仙豆を押し込む。

「んむ！？ う、んん！」

よしよし、ちょっと強引だが仙豆を飲ます事ができた。

「な、何を……！？」

フェイトさんが目を見開き、自分の手の平を見つめる。  
「じゃあね」

身体の調子に驚くフェイトさんにそう言って、なのはさんの下へ戻る。

「ふう、仕事をやり遂げたって感じだ」

「れ、レンヤくん、何を飲ませたの？」

なのはさんが困惑したように聞いてくる。

「ん？ 仙豆だよ」

「仙豆？」

きよとん、とするなのはさん。  
いちいち可愛いな。

「うん、結構前から思ってたんだよね  
フェイトさんの気って、常に弱々しいんだ。  
栄養が取れてないというか、なんというか。  
だから仙豆を食べさせた。」

正直、何も言わずに決行したのには反省している」

「う、ううん、それはいいけど」

「今回のあのジュエルシードはなのはさんに任せるよ、フェイトさ

んと話したい事もあるんでしょ？」

「！ うん、分かった！」

ありがとう、レンヤくん」

さて、俺はユーノくんと一緒に傍観する事にしよう。  
アルフさんがこっちに攻撃してこない限り、だけど。

「あ、仙豆のせいで前よりパワーアップしたらゴメンね」

「あ、あはは……」

流石のなのはさんもコレには苦笑い。

- - - - -

「フェイト！ 大丈夫かい！？」

フェイトはアルフの言葉が耳に入っていないのか、手を握り締めた  
り、開いたりを繰り返している。

「フェイト？」

「力が、溢れてくるみたい……」

フェイトが呟く。

「え？」

「あの子が口に入れたモノを飲み込んだら、身体の疲れや痛みが全  
部なくなっちゃった……」

フェイトはなのはと話す、煉夜を見つめながら言う。

「ほ、本当かい？」

「うん」

「あ、アイツ、何でそんな事をしたんだろう」

「分かんない」

二人（一人と一匹？）は揃って首を傾げるのだった。

## 第14話 時空管理局（前書き）

管理局登場なう。

## 第14話 時空管理局

ズドオオオオン!!

うわぁ……

かめはめ波の比じゃねえくらいデカい光の柱が空に昇った。

フェイトさんとなのはさんの戦闘は二人のデバイスがジュエルシードを間にかち合い、本気で壊れる5秒前というほどの罅が入り、そしてジュエルシードから凄まじい光が発せられた事により終了した。

フェイトさんの動きにキレがあったような気がしたがどうなんだろう。

仙豆が凄い効いたのかな？

しかし、なのはさんも大分強かった、やはり、戦闘民族と言われているあの親の遺伝はあるのか、魔法を最近始めたばかりなのに成長のスピードが速すぎるぜ。

「なのは!」

ユーノくんがなのはさんの方へ駆けて行く。

フェイトさんはバルディッシュを待機状態に戻し、あろうことか、

発動しかけているジュエルシードを素手で掴んだ。

「フェイト!!」

「う……く……」

「フェイト!! ダメだ! 危ない!!」

アルフさんが叫ぶ。

フェイトさんの手の中のジュエルシードは光を放ち、今にも発動しそうになるが

手袋が弾け飛んでも構わず、ジュエルシードを抑えつけ、フェイトさんはジュエルシードを封印した。

この世界の女の子達は俺なんかよりも心が強いです。

ジュエルシードを封印したフェイトさんは立ち上がるが足下がフラつき、倒れそうになる

「フェイト!!」

しかし、それを人型になったアルフさんが受け止め、フェイトさんを抱きかかえる。

そして、そのまま飛び去って行った。

「あ……！」

なのはさんはただそれを見ているしか出来なかった。

- - - - -

その後、俺もなのはさんもそのまま家に帰りついた。

レイジングハートは自己修復機能で明日にはなおるようだ。

自己修復機能って、もはや地球の科学レベルを超えてるな。

それにしても、フェイトさんは手、大丈夫だろうか……

仙豆を渡しに行きたいが、そこまで空気を読めない訳じゃないから  
なあ……

仕方ない、今日はもう寝よう……

お休み

「ミ」

ブルータス、お前いつの間にベッドの中に……

.....  
チュンチュン.....

もう朝かよ.....

何か、眠れなかった。

なんというか、気分が高ぶっているというか、遠足前日みたいな.....

とにかく眠れなかった.....

頭ダル.....

そして、目に入るは仙豆。

.....。

.....。

.....。

カリッ

さて、今日も頑張ろうか。

・  
・

・ ・ ・ ・

おや？ ない……

探れど探れど、フェイトさんの気が見当たらない。

この街にいる筈なんだがな……

ああ！ そうか、フェイトさんは時の庭園に行ったのか？

今日行く日だったの？

しまった、知っていたら無理矢理にでもついて行くんだって

そうだ……

今フェイトさんが時の庭園にいるって事はフェイトさんの気を見つ  
ける事が出来れば、瞬間移動で行けるんじゃないか？

早速、手当たり次第に探ってみよう……

- - - - -

結論から言つとだ。

ダメでした。

フェイトさんの気は見つからなかった。

くっ、折角母さんに無理言ってまた学校休ませて貰ったのに！

まあ母さん自体はスゲーニコニコしてたが、それ程気にはしてないみたいね。

いつもニコニコしてる母。

いつも無表情な俺。

これアレだな、銀髪オッドアイってのもあつて確実に親子に見られないだろうな……

ま、まあそれはいいとして、フェイトさんだよ。

俺に悟空並みの気を探る力があれば時の庭園にいるフェイトさんを見つける事が出来るかもしれないが、今は無理だ。

時の庭園に一回でも入る事が出来ればなあ  
瞬間移動が可能かもしれん。

何このルーラ。

まあ、今はそんな事を言っても仕方ない。

ずっと気を探るのに集中してたからなあ……

気分転換に散歩にでも行く事にするか。

……………  
で

《オオオオオ……！！》

こうなると。

まさか散歩に出て公園に言ってみたらじんめんじゅみみたいな樹の化物に襲われるっていうね。

ジュエルシードが見つかって運がいいのか、悪いのか。

《オオオオオ！！》

超怖え

一応なのはさんに念話を送ったが……

来るまで何とかしないとね。

とりあえず適当に気弾を撃ってみる。

キンッ！

え？ 鋼体？

い、いや、バリアか……

今までのとはひと味違う感じがするぞ

ジュエルシードもそろそろ本気出してきたようです。

《オオオオオオオオ！！》

じんめんじゅ（仮）から太い根が伸び、俺へと迫る。

「残念だったな！ 舞空術だ！」

迫りくる根を空に飛んで避ける。

バキバキバキ！！

ドシュッ！！

……根が90度くらい直角に曲がって空にいる俺に突っ込んで来てるんだが。

ハハッ、対空攻撃とか。

「さ、3倍！！」

界王拳を発動し、避ける。

避けたと安心しちゃダメって事がよく分かりました。

《オオオオオオオオ！！》

じんめんじゅ（仮）が叫び根の数が増え、さらに迫って来る。

とうとう、あれを使う時が来たようだ……

俺は手の平に気弾を作り出し、その気弾を薄ーく、鋭利に伸ばして行く。

「行くぞ、気円斬！！」

迫り来る根に向かい、投げつける。

ザンツ！！

見事に根が斬れた。

さすが気円斬。

クリリンの作った技の中でピカイチだな

「もういっちょ！ 気円……連斬！！」



……さて、何かなのはさん達が来る前に倒せちゃった訳だが。

ジュエルシードって強い力当てたら封印出来ちゃうのかな？

もう、封印状態になってるんだが。

ふーむ。

キラン

「ん？」

ズドン！

「うおお！？」

何か飛んで来た！  
ま、魔力弾か？

「ジュエルシードを渡して」

フェイトさん降臨。

《Arc Saber》

バルディッシュ、サイズフォームの先端に形成された光刃が放たれる。

え、ちょ……！

《Protection》

ガキン！

「大丈夫？ レンヤくん！」

なのはさんも降臨！

なのはさんがヒーローみたいな登場の仕方をしたんだけど。マジかつけえ。

「封時結界、展開……！」

ユーノくんが結界を展開する。

そっぴや、俺が単独で戦う時、結界とか貼れないから下手したらバシるな……

今まで一般の方にバレなかったのは運が良かったとしか言いようがないという。

「邪魔をしないで」

「私は、フェイトちゃんと話しがしたいだけなんだけどな」

フェイトさんとなのはさんが一触即発な状態になる。

「邪魔をするなら……」

《Device form》

フェイトさんがバルディッシュを構える。

「フェイトちゃん、もし私が勝ったら、お話、聞かせてくれるかな？」

《Device mode》

なのはさんもレイジングハートを構える。

……………どうしよう、いきなり過ぎてついて行けない。

二人が同時に飛び出し、打ち合う、かと思った瞬間。

ドシュウウウー！！

空に魔法陣が浮かび上がり……

「ストップだ!!」

誰かいた。

「!?!」

「ここでの戦闘は危険すぎる!」

あれは……

そうか!

「時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ! 詳しい事情を聞かせて貰おうか」

クロノくん、クロノくんじゃないか!

顔を見れば男って分かるけど、声だけ聞いたら、あれ? 女の子? って思うくらい、14歳にしては幼いボイスをしているクロノじゃないか!!

「何かけなされている気がする……」

## 主人公紹介2

【如月ぎわいづき 煉夜れんや】

知つての通り主人公。

オッドアイであり、右目が緑、左目が紫である。

界王拳や気の使用は何も問題なく行えるが、SSS級もの魔力を一度も使った事がない。

SSSという凄まじいものなのだが、気が便利すぎて本人すらその存在を忘れる事がある。

ずっと気だけを練習していたため、自分でも知らないうちにリンカーコアに気の膜を張っており魔力が微妙にか出せない状態になっている。

が、これを聞いても本人は別に気にしないだろうし、気の膜自体もすぐに取り外せるものである。

【如月くん所持品】

「仙豆」

言わずと知れた、超回復力を持つ豆。  
そんなに美味しいわけではない。

もう数秒後に死んでしまうような傷を負ってしまったとしても一粒食べるで一瞬で全快する。

傷を治す他にも疲労回復や10日間何も食べなくてもいい程の栄養が取れる。

しかし、病気には効かない。

「ジュエルシード」

なんやかんやでちゃっかり所持している、願い保留ポルンガ（仮）がいるジュエルシード。

願いは考え中。

分かっているとは思うが、如月くんは基本的、無表情。

だがようは笑わなければ言い訳で驚き叫んでる時は驚いた表情をしているし、恐怖（主に高町親子の威圧）に染まる時は泣きそうな表情をしたりもする。

## 第15話 アースラ（前書き）

書いてる途中で眠ってて、何かよく分からなくなった。

## 第15話 アースラ

「時空管理局？」

ユーノくんが呟く。

とうとう来たな。

正直今日来る事なんて忘れてた。

「まずは二人共武器を引くんだ。  
このまま戦闘行為を続けるなら……」

クロノくんが降りて来る。

「!？」

ズドオオオン!!

「フェイト！ 撤退するよ、離れて!!」

アルフさんがクロノくんに向かって魔力弾を発射する。

「……!!」

フェイトさんは着弾する魔力弾の爆風と共に飛び出し、アルフさん

と一緒に逃走する。

「待て!!」

クロノくんが逃げるフェイトさん達にデバイスを向け、魔力弾を放とうとする。

「何してんだ」

スパン!

「うあっ!?!」

俺はクロノくんの頭をはたき、魔法の使用を止める。

「うわー、管理局員を叩くなんて度胸あるなあ」

ユーノくんが言う。

え、まずかった!?!

俺、捕まる!?!

捕まっちゃう!?!

「な、何をする!!」

「な、何をつて、う、んん!! ゴホン。

背後から傷だらけの女の子を狙っていたから止めたただけだ」

フェイトさんの気が仙豆を無理矢理食べさせる前よりも弱々しくな  
ってたんだよな。

手の怪我也有だろうし、心配だ。

仙豆を渡したい。

「傷だらけ……？」

フェイトちゃん、怪我してたの!？」

なのはさんが言う。

「うん、多分

大分参ってる筈なんだが、精神力が強いんだな」

いや、精神力というより、プレシアさんを悲しませたくないって思  
いが体を動かしているのかも知れない。

「フェイトちゃん……」

心配そうなのはさん。

「と、とにかく君が持っているロストロギアを渡すんだ」

と、クロノくん。

「ロストロギア……」

ああ、コレか」

俺はジュエルシードを“一個”取り出しクロノくんに渡す。

そこで

『クロノ、お疲れ様』

空中に映像が映し出され、映っている女性がそう言う。

リンディさんじゃないか……

「すみません、片方は逃がしてしまいました」

俺の方をチラッと見ながら言うクロノくん。

さて、何のことやら。

『んー、ま、大丈夫よ

それでね、ちょっと話を聞きたいから、そっちの子達をアイスラに案内してあげてくれるかしら？』

「了解です、すぐに戻ります」

アイスラか……

さて……

「帰るか」

ピツと額に指を置き、瞬間移動のポーズをとる。

「ええ！？ 帰っちゃうの！？」

すまない、俺にはリンディ茶を飲む勇気がないんだっ！！

「うう、一緒に行こうよ」

と、なのはさんが言う。

俺の服の袖をキュツと掴んで。

不安そうな表情で。

若干上目使いで。

「大丈夫だ、問題ない。  
行こうか」

なのはさんは魔性の女だったようです。

いつの日か同じような事を言った気がする。

「なのは、僕もいるんだよ……」

すまない、ユーノくん、忘れていた。

- - - - - 【アースラ内部】

とうとうやって来たぜ、アースラ。

宇宙戦艦みたいで格好いいな。

「なのはさん、探検しよう

フリーザ様がいるかも知れない」

「た、楽しそうだけど、今はやめよ？

あと、フリーザ様がいたら怖いよ……」

ホッホッホ！！ 見てくださいまするゾーボンさん、魔法少女ですよ！

いかん、思いの他テンションが……

落ち着け、俺。

「探検はさせないし、そんな妙な奴もここにはいない」

クロノくんがぶっきらぼうに言う。

いずれクロノくんもドラゴンボールの虜にしてやる。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
ユーノくんによる時空管理局の説明を聞きながらしばらく歩くと

「ああ、何時までもその格好というのも窮屈だろう、バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

とクロノくんがなのはさんに言う。

「あ、そっか、そうですね、それじゃあ……」

そう言いなのはさんはバリアジャケットを解除する。

「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

クロノくんがなのはさんの足下にいるユーノくんと言う。

……………？

「ああ、そう言えば、そうですね  
ずっとこの姿でいたから忘れてました」

ああ、そうか、ユーノくんってフェレットじゃないんだっ

「？」

なのはさんが何を言っているのか分からないのか、きょとんとして  
いる。

そして、ユーノくんが発光する。

ユーノくんは男の子になった。

「あ、ああ、ふ、ふえええ!？」

なのはさんがすげえ驚いている。

「? なのは?」

「ゆ、ユーノくんて、ユーノくんて、あ、あのその、ええええ!？」

「なのはさん、少し落ち着こうか  
深呼吸しよう」

「う、うん、すーはー、すーはー」

なのはさんがゆっくりと深呼吸をする。

「僕の本当の姿見せた事なかったけ?」

「ねえよ」

あれ? と考えているユーノくん。

「正直、ユーノくんが人間だったかは別にどうでもいいんだ、  
だが一つ聞きたい」

俺はユーノくんの肩に手を置き言う。

「何? レンヤ」

不思議そうな顔をしているユーノくん

「温泉は楽しかったか？」

「!？」

俺の言葉にユーノくんはビクツとする。

「俺が士郎さんと恭也さんに挟まれてベジータ<sup>アウアロン</sup>ってる時にユーノくん、君は男にとっての全て遠き理想郷でお楽しみだったと、そういうわけだな？」

「ぼ、僕は、みんなの裸は見えていない!!」

首を振りながらそう言うユーノくん。

「誓つか？」

「ち、誓つさ！」

そうか、見てないのか、よかったよかった。

「でもなのはさんの下着姿とかは何回も見てるよな？」

「!! そ、そんな訳……」

「ユーノくんの気に乱れを感じる」

「ごめんなさい」

正直に謝ったのは誉めよう。

しかし

「羨ましい」

全く羨ましいなあ！

「え？ レンヤくん、う、羨ましいって……？」

聞かれてた……

「な、何でもない、忘れて」

「う、うん」

だから、何故こんな主人公みたいな事を……！

「んん！ もう、いいか？」

クロノくんが咳払いをし、そう言う。

「君達の事情は知らないが、艦長を待たせているので出来れば早めに話を聞きたいのだが」

「あ、はい」

「すみません」

「子供の内からそんな真面目だと、ハゲるぞ」

ピキッ！

クロノくんのこめかみに血管が浮き出る。

「き、君は……！」

プルプルと僅かに震えるクロノくん。

「あ、あわわ！」

レンヤくん！ そんな事言っちゃ駄目だよ！ 謝らなきゃ！」

「ごめんなさい」

「う、く……」

ま、まあいいだろう」

「なのはの言う事、素直に聞くなあ……」

- - - - -

「艦長、来てもらいました」

艦内の一室に入ると

「おお……」

盆栽や鹿威しがある、外国人が日本にかぶれてテンションの赴くままにつくちゃったというような和風な部屋だった。

何回か日本に来た事があるんだろうか。

「お疲れ様、まあ、三人共、どうぞどうぞ、楽にして」逆に楽に出  
来ない空間なんだけどね、こ」

・  
・  
・  
・  
・

「なるほど、そうですか

あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはアナタだったん  
ですね」

リンディさんがユーノくんに言う。

「それで、僕が回収しようと

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

「……………」

しゅんとするユーノくん。

「あの、ロストロギアってなんなんですか？」

なのはさんが聞く。

ロストロギアって、ロストロ、ギア？ ロスト、ロギア？

「ああ、遺失世界の遺産……って言っても分からないわね

えっと」

と、リンディさんが親切にもロストログアの説明をしてくれているので、出されたお茶を飲みながら聞く。

……普通に飲んじまっただが、普通のお茶だった。

断じて甘く無かった。

まあ、流石に初対面でいきなり自分と同じ量の砂糖を入れたりはないか。

それにしても、俺がここにいる理由ってあんまり無いような気がする。

カコーン

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ、複数個集まった時の影響は計り知れない」

ジュエルシードってやっぱり恐ろしい物なんだな。

たった一個でポルンガ（仮）が出て来た理由が分かったぜ。

「聞いた事があります。」

旧暦の462年、次元断層が起こった時の事」

「ああ、あれは酷いものだった」

嫌な、事件だったね……

じゃなくて、もはや何の話をしているのか分からなくなってきた。

「繰り返しちゃいけないわ……」

と、リンディさんが神妙な顔で言い、お茶に角砂糖を入れた。

「あ……」

なのはさんが驚いて小さく声を上げた。

お茶と砂糖って相性いいんだろうか……

「これより、ロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

リンディさんが言う。

「「え」」

俺を除いた二人が驚く。

ヤバイ、もはやかすれてきているとは言え、原作知識をそれなりに持つてる俺としては、色々と驚けない。

「君達は今回の事を忘れて、それぞれの世界へ戻って、元通りに暮らすといい」

「でも、そんな」

「次元干渉に関わる事件だ、民間人に介入して貰うレベルの話じゃない」

クロノくんが言い放つ。

「でも！」

なのはさんは納得いつてないみたいだね

「まあ、急に言われても気持ちの整理がつかないでしょ、今夜一晩よく考えて、それから改めてお話しでしょ」

そう、リンディさんが締め括り、お開きになった。

- - - - -

お開きになった筈なんだがなあ。

「ごめんなさいね、あなただけ残って貰って、すぐ終わるから」

なのはさんとユーノくんは一足先に帰りました。

「さて、聞きたいのだけれど、あなたが使った力、あれは一体何かしら？」

モニターに映し出されるは、俺とじんめんじゅ（仮）の戦闘。

ああ、撮られてたのね。

俺がここにいる理由が一気に出てきたな……

……どう説明すればいいの？

## 第16話 気（前書き）

能力バレたなう

## 第16話 気

「俺の力ですか」

「そう、良ければ教えてくれない？」

俺の力……

ふむ。

「気です」

「キ？」

「そう、気」

「……………」

「……………」

……………。

「え？ それだけ！？」

そんな驚いた表情をされても……

「気は気としか言いようがない」

「キって言うのがそもそも何なのか分からないんだけど……………」

そこからだったか……

仕方がない。

「ちょっと待ってて下さい」

ピシュン！

「え？」

「なっ！？ 消え……」

ピシュン！

「ただいま」

驚いているリンディさんとクロノくん。

……あ、クロノくんいたんだ。

「い、今のは？」

「瞬間移動です」

「瞬間移動？」

「そう、瞬間移動」

「……………」

「……………」

……………。

「だからそれだけか!？」

「だって、瞬間移動は瞬間移動としか言わざるを得ないじゃないか」

「ま、まあ、あなたの力が凄い事は分かったけど、それは何？」

リンディさんが俺が持つてる袋を見ながら言う。

「ああ、これは今、瞬間移動で俺んちの部屋に行って取って来た……」

袋の中身を取り出し

「ドラゴンボール（全42巻）です」

リンディさんに渡す。

「もはや、どこからシッコめばいいの………」

何か微妙な顔になっているリンディさん。

まあ、とにかく

「それを読めば気が何か分かる！」

「僕達は漫画を読む暇など……」

クロノくんがそんな事を言う。

「口で説明してもいいけど……」

「けど？」

「正直めんどくさい」

ピキッ

クロノくんのこめかみに血管が浮き出る。

クロノくん、怒りっぱいな。

「それじゃあ、これ以上クロノくんを怒らせたらどうなるか分からないので、俺はそろそろ帰ります」

俺の気についてはそれを読めば本気で分かりますよ、それじゃあ」

ピシュン！

「え、あ！ 言うこと言ってさっさと行っちゃったわ……」

……… ちょっと、読んでみようかしら」

「艦長！？」

……… 【自宅】

さて、どうしようかな。

おそらくなのはさんは管理局に協力するだろうからなあ……

よし、俺も協力しようか。

そうと決まれば母さんに相談しよう。

「母さん！」

バーン！

「あらあら、どうしたのレンくん？」

「実は、相談があるんだ」

「しばらく家空けちゃったりするかもって？」

「なん……だと？」

な、何故分かったんだ……！？

母さんはニュータイプだったのか……？

「お母さんは何でも知ってるんだよ？」

レンくんがかいおうけーん！って赤いになれるのも」

そ、そんな……

いつの間にバレてたんだ……！？

「ちょっと前にレンくんが出掛けた時、暇だったから後をつけていったら見ちゃった」

見ちゃった

じゃ、ねえよ！？

ええ、もう既にバレてたとか、考えてなかったよ……

「お母さんはレンくんがしたい事をすればいいと思うよ。」

「か、母さん……」

何て話の分かる母なんだ……

前世はこんなじゃなかったぞ……！

「学校にはお母さんがなんとか言っておくからね」

「ありがとう、母さん

……あ、すっかり忘れてたんだけど、父さんは？」

「ああ、お父さんは出張でしばらく帰って来ないよ」

父さん……

最近見ない（というか普段からそんなに見かけないけど）と思った  
ら出張って……

「ま、まあ、いいや

それじゃ、行ってくるよ」

「もう行くの？ お弁当持っていく？」

「いや、いいよ」

「あら、そう？ それじゃ、行つてらっしゃい」

相変わらずニコニコしている母だぜ。

母さんがニコポ持ってたら大変な事になるな……

母さんと結婚した父さんはある意味ニコポされたと言っても過言で  
はないかもしれない。

よし、じゃあ、行くかな……

「じゃあ、母さん  
行つてきます」

「お土産買つて来てね」

お、お土産……

アイスラッとお土産売ってんのかな……？

ピシュン！

- - -  
シュッ

「こんばんわ」

「！！ あ、あら、びっくりしたわ」

瞬間移動したら、リンディさんがドラゴンボール読んでた。

しかも21巻、あの短時間ですげえ読んでる。

## 第17話 六つのジュエルシード（前書き）

……なんか不完全燃焼みたいな？

今回なんか、自分で書いたのに気に入らない

が、更新する。

妥協も大事だよ、うん（あ

## 第17話 六つのジュエルシード

さて……

俺となのはさんとユーノくんがアースラに来てから結構たつた。

その間にジュエルシードを三つ手に入れ、二つフェイトさんに奪われて行きました。

ジュエルシードはあと六つらしい。

でも、俺がさり気なく所持してるジュエルシードはまだバレてないから、あと五つ？

いや、もしかしたらこのジュエルシードはフェイトさんが所持する筈だった奴なのかもしれない。

ならばやっぱり後、六つ？

うーん、わかんねえ、まあ何とかなるさ。

あ、ちなみに気の事についての説明だが、クロノくんにすげえ危険視されました。

読んだのか、クロノくん？

安心してくれ、今の俺じゃ10倍界王拳かめはめ波を地上に向けて

撃つてもちよつとデカイクレーターを作るくらいしか出来んから。

10倍界王拳でもラディッツと戦う前の悟空より弱いし、多分。

まあ、とにかくリンディさんには「悟空の真似してたら出来るようになった」と説明した。

- - - - -

ウー、ウー。

ん？ 何だ？ 警報？

「エマージェンシー、搜索域の海上にて大型の魔力反応を感知！」

ついに来たか……

モニターに映る、フェイトさんを見る。

あ、俺、さっきまでクロノくんに雑用をやらされてました。

何だろう、クロノくんの俺の扱いがなのはさん達と大分違うんだが……

「何とも、呆れた無茶をする子だわ」

「無謀ですね、間違いなく、自滅します」

クロノくんってよく“無謀”って言うよね。

よく考えるとさ、“無謀”ってそうそう言わないよね。

“無茶”とか“馬鹿な事”とかでもいいと思うんだ。

「フェイトちゃん！」

なのはさんが走って来る。

「あの、私、急いで現場に！」

「その必要はないよ、ほうっておけばあの子は自滅する」

なのはさんの言葉にそう返すクロノくん。

「！」

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所で叩けばいい」

……時空管理局って、警察みたいなもんだよね？

クロノくんの言葉が警察のものとは思えないんだが。

「クロノくん」

「？　なんだ？」

スパン！

「うあっ！？」

取りあえず、クロノクンの頭を何故かあったスリッパではたいて

《なのはさん、そしてユーノくん》

念話を送る。

《！ レンヤくん？》

《今から、瞬間移動でフェイトさんの所に連れて行ってあげる》

《ほんと！？》

《うん、だから二人とも俺に掴まって》

《うん！》

《分かった！》

なのはさんとユーノくんが俺の肩に手を置く。

《いきなり空に投げ出されるから気をつけてね》

《うん！》

「リンディさん、クロノくん  
ごめんなさい、命令違反する」

そう言い、額に指を当て、フェイトさんの気を特定する。

「な、なに！？ 待つ」

ピシュン！

- - - - -

なのはさん達はフェイトさんの所に送り、なのはさん達はフェイトさん、アルフさんと協力してジュエルシードを封印しようとしている。

俺？ 俺は傍観してる。

今回ばかりは俺に出来る事がないんだよ……

六つのジュエルシードを強制封印出来るくらいの威力がある攻撃が無いんだ、一つ一つ封印するにしても不安定な状態だから何が起るかわかんねえし……

出来て、少しジュエルシードを抑えるくらいか……

魔法が使えないからなあ……

魔法も覚えるべきだろうか……。

いや……

・  
・  
・

・

ユーノくん、アルフさんが魔力の鎖でジュエルシードを抑えている。

だが相当キツそうだな。

やっぱり……

「ユーノくん、アルフさん、俺も出来る限り手伝う事にする」

「レンヤ！」

ユーノくんとアルフさんに並ぶ。

「やった事ないけど……」

頼むぞチートボディ！」

かめはめ波のポーズを取り

「10倍界王拳の、超かめはめ波だ！」

全身の気を手の平に集中させ

「か、め、は、め……」

解き放つ。

「波あああ……！」

通常よりも太いかめはめ波がジュエルシードに向かう、そして

「分かれる!」

かめはめ波が六つに拡散し、それぞれのジュエルシードに直撃する。

すげえ、ぶつつけで出来た。

「す、凄い! ジュエルシードの力がかなり弱まった! これならいけるよ、なのは!」

「うん! 行くよ、フェイトちゃん!」

なのはさんとフェイトさんの足下に巨大な魔法陣が現れる。

そして、なのはさんのデイベインバスターとフェイトさんのサンダーレイジがジュエルシードに放たれた。

第18話 雷にぶち当たるの痛い……（前書き）

今回なんか微妙な所で終わってしまった……

次回辺りから如月くんがオリ主っぽい事をする……かな。

第18話 雷にぶち当たるの痛い……

結果は見事に六つまとめて封印する事が出来た。

が。

ドガアアアン！！

「！？」

突然雷の音が轟き、海へと落ちる。

「！？ か、母さん？」

フェイトが空を見上げ、恐怖の表情で呟く。

そして、再び轟音と共に、雷が落ち

フェイトに直撃する

「うああああ！？」

かと思われた。

「…………え？」

フェイトの目の前には、雷に打たれ、焼け焦げた煉夜がいた……

そして、煉夜はゆっくりと海に

ドポーン――!

落ちて行つた。

「れ、レンヤくん――!」

なのはの悲鳴が辺りに響き渡つた……

――――

ゴポゴポゴポゴポ……

ゴポゴポゴポ……

ゴポゴポ……

ゴポ……

……。――――

カリッ

バシュウウウウ――!――!――!

ザッパーン！！

「復活！！」

スッゴい、痛かった！

「え？」

なのはさんがハトが豆鉄砲くらったような顔をしている。

「なのはさん、何か忘れてないか？」

俺には仙豆と言う反則的な道具があるんだぞ？」

なのはさんに向けて、仙豆の入った袋を見せる。

「あ……」

そういえば、というような顔をするのはさん。

しかし、本当に痛かったよ。

10倍界王拳を使ってたからまだよかったものの、もし界王拳を使  
ってなかったら死んでたかもしれない、割とガチで。

俺、バリアジャケットを着てるわけじゃないしさ。

二次創作だと、あの雷を受けるオリ主達がいるけど、凄い勇気だ。

俺なんて10倍にしているから大丈夫だって思って受けたんだけどな  
あ……

でも、フェイトさんに雷が落とされると分かかって、ただ見ているだけ何て出来ないしなあ……  
みんなより強い力を持っている分、余計に。

しかし、プレシアさんの魔法の威力。

そして、それをフェイトさんに向けるという非道さ。

でも、原作だとフェイトさんはアレを受けても大丈夫だったから、非殺傷設定ではあったのか？

手加減してくれていたのか、いないのか、微妙な感じでわかんねえ……

ガキイイン！！

と、そこまで考えていたら、いきなり何かがぶつかり合ったような音が聞こえた。  
音の方を見ると

「ちい！」

アルフさんの拳を受け止めている、クロノくんがいた。

いつの間に……

そして、アルフさんはクロノくんを弾き飛ばし、三つのジュエルシ

ードを奪い

「フェイト！ 退くよ！」

「え、あ、う、うん！」

魔力弾を海に叩きつけ目眩ましをし、フェイトさんと逃げて行った。

ちなみに残りのジュエルシード三つはクロノくんが回収してました。

うーん。

ここは敢えて追いかけない事にしよう。

- - - - -

アースラに戻り

「指示や命令を守るのは、個人のみならず集団を守るためのルールです。」

勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達をも危険に巻き込んだかも知れないということ、それは分かりますね？」

リンディさんに怒られています。

うーん、俺はちょっと考えたい事があるから、取りあえず話半分に聞いところ。

さて、これからどうするか……

今まで原作沿いに事を運んで来ていたが、そろそろ勝負に出てみる

のがいいかもしれない。

しかし、そのためにはプレシアさんのいる、時の庭園に行かなければならない。

どうしたものか……

「……ただし、二度目はありませんよ？ 分かりましたね？」

「は、はい！」

「……………」

「レンヤくん？」

「え？ あ！ はい！」

ヤバイ、話半分所が全く聞いて無かった。

……………

あの後、黒幕がプレシアさんだと判明し、エイミィさんにプレシアさんの事についての話を聞いた後、俺達は休暇っぽいのを貰い、久しぶりに家に帰って来た。

あ、ちなみにリンディさんに仙豆の事を聞かれたから、一粒渡してきた。

仙豆って一体どういう風になってるのか調べてみるらしい。

「レンくん、お土産は？」

「アレ、本気で言ってたのか……」

帰ってそうそう、母さんがそんな事を言った。

え、えーと、お土産……

あ！

「アースラの食堂で貰ったクッキーならあるが」

「クッキーかあ、じゃ、紅茶入れるから一緒に食べようか」

そう言い、母さんはキッチンに行く。

そういえば、今リンディさんはなのはさんちにいるみたいだが、俺んちにも来たりすんのか？

なんだかんだで母さんに色々バレてるから別に来なくてもいい気がする……

「はい、紅茶淹れたよ」

母さんが戻って来た。

って、そういえば

「母さん、父さんは？」

「お父さん？ お父さんは海外に出張中だからまだ帰って来ないよ？」

父さああん！！

出張って海外かよおお！！？

出張つか、父さんだけ転勤してんじゃないかという。

父さんの存在感が薄すぎて、俺の父さんは実はいないんじゃないか  
と思えてきた。

「レンくん、今日と明日くらいはいるんでしょ？」

「ん？ うん、多分いると思うけど」

「じゃ、レンくんが休んでる間の授業のノート渡すから、しっかり  
予習してね」

なん……だと……

10日以上休んでるから、ノートが凄い事に。

転生した身としては小学校の授業とか余裕なんだが……  
まあ、やっとか。

.....

「二人揃って休んで、二人揃って登校って、アンタ達二人で何かしてたの？」

今日は久しぶりの学校。

久しぶりに四人揃った気がする。

「べ、別にそんな事ないよ？」

「そうだな、俺はちよつとした家の事情だよ  
俺の方が休んでる期間長かっただろ。」

今日は偶然二人揃って登校したただだよ」

そういう事にしておこう。

「ふうん、ま、でも、元気そうでよかったわ」

何かちよつと疑わしげな表情をしてるアリサさん。

ははは……

・  
・  
・  
・  
・  
・

「今日の放課後、一緒に遊べるかな？」

すずかさんが言う。

「うん、大丈夫！」

「じゃあ、うちに来る？ 新しいゲームもあるし」

新しいゲームか……  
気になる、が

「俺は参加出来ないから悪しからず」

ちよつと、やることが。

「何だよ？」

何でって言われても……

「また適当な理由つける気じゃ……」

「そんな事をしてても無意味だという事を理解しているから、変な理由付けはしない。

ただ今日はやるだけだから」

「そっか、残念、レンヤくんとも久し振りに遊びたかったんだけど」

すずかさんが優しくすぎて笑えない自分がつらい。

《というわけでそっちは任せた》

《え、う、うん……？》

なのはさんは何かよく分かってないみたいだが、まあいいか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0830y/>

---

テンプレチートオリ主に強制的にさせられた元一般人のお話

2011年11月9日20時10分発行